

# 地域コミュニケーション論からコミュニティ心理学へ

ー 短大・大学27年間の専門講義とゼミの軌跡 ー

植村 勝彦

From community communication study to community psychology :  
A track of lectures and seminars for 27years

Katsuhiko Uemura

## 要旨

短期大学および大学における私の27年間の専門講義とゼミの記録を辿った。コミュニティ（地域社会）の諸問題を心理学の視点から捉える「コミュニティ心理学」に基盤を置いてきたが、設立された学部・学科の事情や当時の社会における認知度などから、当初は、社会心理学を主体とする地域社会の人間関係論、次いで、福祉学を取り入れた社会心理学、名付けて福祉社会心理学の視点から講じていた。その後学会の発足もあり、コミュニティ心理学が世間に認知されてきたことを受けて、新世紀とともにコミュニティ心理学を科目名として掲げて現在に至っているが、その間の講義内容の変遷やゼミ生の卒論の動向などを紹介しながら振り返った。

キー・ワード：地域コミュニケーション論，社会コミュニケーション論，福祉社会心理学，  
コミュニティ心理学

## 緒 言

27年間の本学における教員生活（短大の6年を含む）を終えるに当たり、この間、私の中核の専門科目として一貫して講じてきた、「コミュニティ（地域社会）」の諸問題を心理学の視点から捉える講義とゼミの軌跡を振り返ることにしたい。

短期大学コミュニケーション学科，文学部コミュニケーション学科，コミュニケーション学部コミュニケーション心理学科，心理学部心理学科と、新設や改組転換される学部・学科の名称との関連で、科目の名称や内容もそれに合わせざるを得ないという制約もあり、当初は「地域コミュニケーション論」として、“コミュニケーション”に主眼を置いた形でスタートしたが、学科名称に「心理学」が冠せられるようになるにしたがい、本来の姿である「コミュニティ心理学」へと移行していくこ

とになった。

以下に、それぞれの時代ごとの変遷を辿ることにするが、次節の“Ⅰ 短大における「地域コミュニケーション論」の概要”は、文学部時代から今も続く本学科の同好会誌『コミュニケーションと人間』第1号（1992）に、「地域コミュニケーション研究の紹介」と題して、短大時代の内容を紹介しながら新しい文学部コミュニケーション学科での講義内容の意気込みを語る、というスタイルで書いたものの再掲である。ただ、本稿との関連で一部新たにデータや資料を追加したり、不要な部分を削除した点があることをお断りしておく。

また、この会誌には、学科専任教員の1年間の記録を書くコーナーが用意されており、私は「'92 研究室通信」などの表題で、1992年からこれまで毎年綴ってきているが、本稿を書くに当たって、必要に応じてこれらを参照および引用してい

ることも断っておきたい。

## I 短大における「地域コミュニケーション論」の概要

### 1 はじめに

1992年4月現在、「コミュニケーション学科」を設置している大学・短期大学は全国に8校あるが、このうち「地域コミュニケーション（論）」という科目を置いているところは、北から順に常盤大学人間科学部（83年開設）、東京女子大学現代文化学部（88年開設）、愛知淑徳短期大学（87年開設）、愛知淑徳大学文学部（91年開設）、関西女学院短期大学（91年開設）、徳島文理大学文学部（92年開設）、大分県立芸術文化短期大学（92年開設）、の7校に及んでいる〔ちなみに他の1校は、大阪国際女子大学人間科学部（92年開設）〕。

とりわけ、この4月、大分県立芸術文化短期大学に第4番目の学科として開設されたコミュニケーション学科では、「地域社会の理解」を重視しており、数あるコミュニケーション論科目の中で、ただひとつ必修科目として「地域コミュニケーション論」を位置づけているほどである。これは、大分県が「一村一品運動」に象徴される、地域活性化に力を入れていることの具体的な現れであろうが、いささかなりともこの学科の開設に関わって協力してきた私にとって、たいそう心うれしい事柄である。

ところで、この「地域コミュニケーション論」という科目は、1983年全国の大学で初めてコミュニケーション学科を設置した常盤大学のカリキュラムに既に用意されている。その後1987年に全国で2番目のコミュニケーション学科として（短期大学としては最初）愛知淑徳短期大学にそれを創る際、その任を引き受けた私がこれを借用して以来、その後が続いて設立されたコミュニケーション学科が、いずれもこの科目を取り入れていることをみるにつけ、自分の判断に誤りがなかったことを確信するとともに、改めて地域社会の問題が今日という時代においても重要性を認識する次第である。

## 2 地域コミュニケーションとは

地域コミュニケーションとはこういう内容のものを指す、といった概念や定義は、現在のところおそらく存在しないであろう。上に挙げた大学の中で、たとえば東京女子大学の学生便覧には「社会的コミュニケーションの原型は、地域コミュニケーションに求めることができる。それを地域の社会関係と社会構造との関連のなかで理論的にとらえ、コミュニケーション理解の基礎学力をつくりあげることには」と紹介されてあるし、関西女学院短期大学のそれには「地域コミュニケーションを支える地域社会を中心に、地域における人間関係や住民組織の現状と問題点を明らかにするとともに、生活文化や地域福祉をめぐる課題を追究する。これと関連して、地域コミュニケーションのネットワークづくりの意義や方法を検討したうえ、まちづくりのあり方について理解を深める」と述べられている。さらに、徳島文理大学のカリキュラムでは、地域コミュニケーション論は3科目用意されており、それぞれ「集団心理学を含む」「地域地理学を含む」「歴史地理学を含む」と副題がつけられている。

## 3 短大における講義内容

ところで、私はこれまで5年間（最初の1年間は開設準備に携わった）、愛知淑徳短期大学コミュニケーション学科で地域コミュニケーション論を講義し、ゼミ生を指導してきたわけだが、そこではどんなことを行ってきたのかを紹介することにしよう。

1991年の履修要覧には、講義概要として次のように述べている。すなわち、「地域社会の復権と活性化、地域福祉向上の基礎は、地域社会の人間関係のいかんにかかっている。そこで、現状認識の手掛りとして、“いま、地域社会はどうなっているか”をテーマとして、大きく二つの観点から考察する。第一は、地域社会そのものに焦点を合わせ、地域社会変容の背景要因、現状の実態と問題点、対策としてのコミュニティ形成運動の理論と方法、コミュニティ意識の形成について紹介する。第二は、地域社会とコミュニケーションの関係からの視点で、具体的には地域社会を構成する

子ども、老人、障害者、主婦などにそれぞれ焦点を合わせて、その現状とあるべき姿、今後の課題などについて考える」と。そして、以下に記す「目次」に従って進めていった。

なお、本科目に限らず、各論はa、bに分かれており、aは1年後期科目で必修、bは2年前期科目で選択である。以下の目次のうち1～7がa（つまり、上記の第一の観点）、8～9がb（同、第二の観点）である。

- 1 地域社会の今昔
  - (1) 地域社会はどのように変化したか
  - (2) 地域社会の変容をどう受け止めるべきか
- 2 なぜ地域社会は崩壊したのか—その背景要因の分析—
  - (1) 社会構造的要因
  - (2) 生活構造的要因
  - (3) 生活意識的要因
- 3 その結果どのような現象と問題が起こったか
  - (1) 過疎地域での問題
  - (2) 都市での問題
- 4 どのような対策がたてられたか—コミュニティ形成の論理—
  - (1) なぜコミュニティが要請されるのか
  - (2) コミュニティとはなにか—定義—
  - (3) コミュニティの要件
  - (4) コミュニティが目指すものはなにか
  - (5) コミュニティ形成の思想
- 5 コミュニティ意識の形成へ向けて
  - (1) コミュニティ意識の研究
  - (2) 問題点の打開に向けて
- 6 コミュニティにおけるリーダーとフォロワー
  - (1) コミュニティ・リーダーの役割
  - (2) フォロワーシップの問題
  - (3) 老人と主婦の社会参加
- 7 コミュニティ形成とコミュニケーション
  - (1) 地域社会におけるコミュニケーションの機能
  - (2) 地域生活と生活情報
  - (3) コミュニティ・コミュニケーション・ネットワーク
- 8 今日の地域社会における人間関係—地域コミュニ

ケーションの実例—

- (1) 子どもと地域社会
- (2) 老人と地域社会
- (3) 障害者およびその家族と地域社会
- (4) 成人と地域社会

## 9 ソーシャル・サポート

- (1) ソーシャル・サポートとは
- (2) 地域社会に存在するソーシャル・サポート組織

評価については、レポートと定期テストとし、例えばaでは、レポート課題は「地域社会の今昔」のタイトルで、原稿用紙換算で20枚以上にまとめるといふかなりハードなもの（50点）と、テストは3問程度（50点）で、例えば「地域コミュニケーションを阻む要因を10コ挙げ、そのそれぞれを簡潔に説明しなさい」、「住民の地域社会に対する「連帯感」を醸成し、活性化させるには、どのような方策を立てるのがよいか。自己の居住する地域を念頭に置いた上で、自らの実行可能性を踏まえて提案しなさい」といった内容のものである。レポートにはとくに力を入れ、地域社会の人間関係の変貌について、父母や祖父母へのインタビュー、統計資料や文献の活用などによって、内容もさることながら、一貫した趣旨のもとに、ともかくたくさん書く練習をさせることがねらいであった。テスト問題についても、自分の考えを述べさせることに力点を置いた。

これまでの5年間、毎年少しづつ内容を変えながら講義してきたが、一貫してのねらいは、地域社会の“コミュニケーション”の問題もさることながら、まず第一に受講生に「地域社会」に目を向ける糸口をつくりたいことであった。なぜなら、居住環境としての地域社会が、彼女らに具体的な意味と力と影響力をもっていたのは、せいぜい小学校卒業までであったろう。中学以降今日まで、地域社会は、おそらくサラリーマンの父たちと同じく“ねぐら”としての意味しかもっていないし、関心の埒外であろうと思われるからである。

しかし、「遠くの親戚より近くの他人」という諺もあるように、地域社会は本来は「家族」と同等、もしくはそれ以上に重要な位置を占めている

ものである。家族が強固な力をもっていなくても、それを取り巻く近隣地域社会が強い結束力をもっていれば、家族の崩壊は食い止められるし、また仮に崩壊したとしても地域で保護できることを、文化人類学の知見は教えてくれている。結婚前の彼女らにとって、地域社会は心理的に遠い存在であろうが、結婚し、子どもを育てるようになると強く意識する存在となろうし、また、そうあってほしいものである。

さらにまた、高齢社会の到来とともに、地域社会のあり方いかんでは、この社会が魅力あるものともなるし、高齢者（将来の自分）に苦痛な社会（現在がそうだ）ともなる。今や地域社会を支える中心は女性であることをじゅうぶん認識する必要があるだろう。

#### 4 ゼミ生の指導

さて、このような意図のもとに行ってきた講義とともに、いま一つの中核であるゼミでは、これまで5年間に93名の指導を行ってきた。いわゆる“卒論”と称するものの提出が全員に課せられているのであるが、彼女らが見いだした卒業研究のテーマを大別すると、およそ次の10分類になる。その集計結果と、論文題目の例を紹介しよう。

- 1位 地域社会観 (20篇)：「近所づきあいの中の援助行動」「女子大学生の地域連帯性」「地域社会に対する主婦の態度」など
- 2位 子ども・教育問題 (16篇)：「都心の過疎化における教育問題」「子どもの遊びにみる地域活動の必要性」「地域社会の中での子どもの遊び」など
- 3位 老人問題・老後生活観 (14篇)：「老人施設入居者の幸福観を規定する要因について」「現代の老人観と高齢化社会への展望」「豊かな老後生活における地域社会の役割」など
- 4位 地域づくり・祭り (10篇)：「大須の町づくりについて」「都市改造計画における地域社会の人間関係」「町内で行われる祭りの現状と参加意識」など
- 5位 地域施設の利用 (7篇)：「コミュニティ・センターの活動現況」「児童館はいかにあるべ

きか」「施設奉仕に対する態度」など

- 6位 マクロ地域社会分析 (6篇)：「漫画サザエさんにみる戦後の地域社会像および地域環境の変遷」「社会変化が自治体広報の内容に与える影響」「ことわざにみる地域の人間の姿」など
- 7位 生涯学習・社会参加 (5篇)：「生涯学習に対する成人の態度」「主婦の社会参加」「生涯学習と地域社会の関わり」など
- 7位 障害者問題 (5篇)：「身体障害者が望む健全者・地域社会の態度」「高校生精神遅滞児者観」「健聴者の聴覚障害者に対する態度」など
- 9位 ごみ処理問題 (3篇)：「ごみ処理問題と地域社会に対する態度」「ごみ処理問題における現代の危機」「ゴミ処理における現状と今後の課題」

その他 (7篇)：「短大生と同和問題」など

なお、研究法からみると、「質問紙調査法」によるもの56篇、「面接調査法」によるもの29篇、「二次資料分析（新聞の投書・行政広報・漫画など）」8篇であった。文献のみによる研究は、私の方針として認めておらず、必ず実証データに基づく分析を要求してきたので、このような結果になっているわけである。

論文の質としては、短期大学という一般的なイメージをはるかに越えた密度の濃いものが多く、統計処理プログラム・パッケージ「HALBAU」を駆使したり、何十人もの面接データの逐語録を分析したり、あるいは漫画「サザエさん」全68巻、5648作品をすべてチェックして量的、質的分析を加えたりなど、1年間をフルに使っての努力の成果には、2年間という年限の問題では決してない、学生の意欲次第であることを改めて教えられる思いがする。

以上のような経過をふまえて、本学における講義やゼミも、当面は、愛知淑徳短期大学コミュニケーション学科で行ってきた内容や方針を踏襲することになるだろう。

ところで、地域社会の問題をテーマとしている心理学の研究者は、わが国にはきわめて数少ない。先に紹介した卒論でも、参考とする文献が皆無に

等しく、ゼミ生を大いに悩ましたのであるが、それだけにすべてが新鮮で貴重な研究である。

愛知淑徳短期大学での6年間は、全国の短期大学で最初のコミュニケーション学科の責任者という役割と、気負いも手伝って、その全精力を学科づくりに注いできたため、（言い訳かも知れないが）研究面では空白の期間となってしまった。今年から始まる愛知淑徳大学コミュニケーション学科では、これまでの経験を生かして、教育・指導と、研究とをうまく両立させながら、学科の基礎づくりに微力ながらも全力を傾注したいと念じている。

## II 文学部コミュニケーション学科における「地域コミュニケーション論1（地域社会）」の概要

### 講義内容

学園創立85周年記念事業の一環として、1991年4月に文学部の4番目の学科として新設されたコミュニケーション学科は、短大コミュニケーション学科の成功を受けて、同じく心理学を中核とする基本構想に基づくものである。当時の文部省の認可を受けた当初のコミュニケーション論のカリキュラムは、個人コミュニケーション科目群・地域コミュニケーション科目群・異文化コミュニケーション科目群・記号コミュニケーション科目群からなっており、私は「地域コミュニケーション論1 a・b（地域社会）」の担当として、2年前・後期にこれを講じていた。ただ、短大とは異なり、選択必修科目としての位置づけである。

講義の趣旨や内容などは、短大時代のそれを完全に踏襲したもので、先に紹介した「目次」に同じである。先の目次では、aに比べてbの内容は極めて簡略に記したが、改めて正確に記せば次のようである。

#### 1 子どもと地域社会

- (1) 子どもにとって近隣社会とは何か
- (2) 子どもの日常生活の現状
- (3) 近隣社会の中の子どものおとな
- (4) 「地域の教育力」の回復を求めて

#### 2 老人と近隣社会

- (1) 高齢化社会の到来とその影響
  - (2) 老人は地域社会に何を求めているか
  - (3) 老人に対する一般成人の意識
- #### 3 障害者およびその家族と地域社会
- (1) 障害者とは
  - (2) 障害者問題一般について
  - (3) 精神遅滞者に対する地域住民の態度
  - (4) 精神遅滞者をもつ家族の社会（世間）への態度
- #### 4 成人と近隣社会
- (1) 近隣社会への無関心と冷淡
  - (2) 近所づきあいの現実
  - (3) 主婦の近隣コミュニケーション行動と内在する問題点
- #### 5 ソーシャル・サポート
- (1) ソーシャル・サポート研究登場の背景
  - (2) ソーシャル・サポートの定義
  - (3) 地域社会に存在するソーシャル・サポート組織
  - (4) サポート組織があることの効果
  - (5) ソーシャル・サポートの測定法

ちなみに、bに関する評価もレポートと定期テストであり、レポートについては、子どもや障害者など対象者を一つ選択した上で、地域社会との関わりから生じる問題を心理学の視点で自由にまとめること。テスト問題については3問程度で、例えば「地域の教育力とは何か。また、その回復のためには、どのような方策を立てるのがよいか、私案を述べなさい」、「町内（自治会）でのコミュニケーションのあり・なし（または、よし・悪し）を測定することが可能となるような、5項目からなる“地域コミュニケーション尺度”を作成しなさい」といったものである。

文学部での「地域コミュニケーション論」の講義に当たって、短大の時以上に意識して付け加えたものがあるとすれば、講義のねらいとして、単に「知識」を付与することが目的ではなく、「人間の問題」として、「自分の問題」として地域社会を把握し、理解し、さらには、参加・行動の準備を整える一歩としてもらいたいこと、人間としての本質的知恵を知らせる講義をしたいこと、で



あった。

### Ⅲ 文学部コミュニケーション学科における「社会コミュニケーション論1 (家族・地域・福祉)」の概要

#### 1 講義内容

設立4年を経た1995年、当時の文部省の管理下を離れ、本学教授会の裁量のもとでの諸決定が可能となった時点で、コミュニケーション学科のカリキュラムの見直しを行った。

その結果、私の講じる専門科目は社会コミュニケーション論群に位置づけられることになり、「社会コミュニケーション論1 a・b (家族・地域・福祉)」として、2年前・後期に担当することになった。初年度の履修要覧には、授業のテーマ(概要)として、「いじめ問題にせよ、高齢者の在宅介護問題にせよ、また震災復興問題にせよ、今日程家族と地域が福祉の問題と密接に関わり合っている時代はない。現代社会の問題を「福祉社会心理学」の視点から考察することをテーマに、下記の内容を取り上げる」として「目次」を提示している。科目名称の変更のみの措置であったが、これを機に講義内容を見直すこととしたものである。

なお、この概要の中に、いじめ問題や震災復興問題の記述が見られるのは、1994年に愛知県西尾市の中学生、大河内清輝君がいじめを受けて自殺したことが大きな社会問題として取り上げられ、また翌1995年1月には阪神淡路大震災が起こったことが背景にある。そして、20年近くを経た今また、全く同じことが2011年の東日本大震災といい、天津市における中学生のいじめ自殺に対する学校や教育委員会の対応が大きな社会問題として現れているのを見るにつけ、複雑な思いに駆られる。

前期(a): 家族と福祉の社会心理学

#### 1 今日の社会と子ども

- (1) 社会化の場としての地域社会(キーワード: 社会化 ー以下、カッコ内はキーワードを表すー)
- (2) 家庭の変容と子ども(少子社会, 子育て支

援)

- (3) 学校と子ども(いじめ・ヴァルネラビリティ)
  - (4) 近隣社会の中の子ども～わが子とよその子～(地域の教育力)
- #### 2 高齢化社会と老人
- (1) 高齢化社会の到来とその影響(高齢化社会)
  - (2) 高齢者と家族(パートナーシップ)
  - (3) 高齢者の社会参加と幸福な老い(役割移行・主観的幸福感)
  - (4) 高齢者の地域ケアと在宅介護(新ゴールドプラン・エイジズム)
- #### 3 障害者およびその家族と地域社会
- (1) 障害者とは(知的発達障害)
  - (2) 障害者に対する人々の知識と態度(完全参加と平等・障害者の日)
  - (3) 知的障害者に対する人々の態度(ノーマライゼーション・インテグレーション)
  - (4) 知的障害者をもつ家族の世間観(親の適応過程)
  - (5) 地域社会の中でのよりよい家族の姿を求めて

後期(b): 地域と福祉の社会心理学

#### 4 地域社会の現状とコミュニティ形成

- (1) 地域社会の今昔(キーワード: 地域社会の変容)
- (2) 地域社会への無関心と冷淡(生活の個人化・社会化)
- (3) 近隣コミュニケーションの現実(ヤマア راشのジレンマ)
- (4) コミュニティ形成とコミュニティ意識(コミュニティ)

#### 5 援助行動

- (1) 援助行動とは何か(援助行動における個人的要因と状況的要因)
- (2) 援助と抑制(傍観者効果)
- (3) 援助の成立過程モデル(社会的交換理論)
- (4) 日常場面における援助行動(lost letter technique)

#### 6 ボランティア活動

- (1) ボランティアとは(有償ボランティア)

- (2) 生涯学習社会におけるボランティア活動（学習ボランティア）
- (3) 青少年の活動への参加と満足度（モラトリアムとしてのボランティア）
- (4) 参加／不参加態度の構造（アイデンティティの確立・利己主義態度）

この構成は、その後2000年に新しくコミュニケーション学部コミュニケーション心理学科が設立されるまで、目次の順序の入れ替えや、内容やデータの差し替えを繰り返しながらも継続された。講義の進行は、各章を構成している節（上記「目次」の両括弧の数字記号の部分）を毎回の単位とし、前・後期とも14回編成で、最後の15回目をテストに当てている。

工夫を凝らした点は3つある。①「目次」に記載されているように、毎回の「キーワード」がその日の中心課題であり、その概念や定義を先ず板書する、②「今日のねらい」を簡潔に口述する、③毎回宿題を出し、それは次回の講義に関係する内容のもので、各自が調べてきたものを、次の講義の中で5分の時間を与えて、A5の紙を配付して講義終了時に提出させる（これは出席チェックを兼ねる）。

例を挙げてみる。2章4節の「近隣社会の中の子ども ～「わが子」と「よその子」～」では、①「キーワード」としての“地域の教育力”について、某教育社会学者による辞典的定義を板書し、②「今日のねらい」として、その定義の中に見られる3つの教育力—家庭の教育力・学校の教育力・地域の教育力—のうち、今日無力化している地域の教育力について、現状と本来の姿を学習することが今日のねらいであることを述べる。それへの伏線として、③「宿題」としては、前週に“「七五三の意味」を調べてくること”を出している。講義は、「わが子」と「よその子」の逸脱行動への親の態度や行動の比較調査データや、子どもの遊び環境やしつけに関する国際比較のデータ、「サザエさん」の漫画の例の提示、子どもの学校や地域での活動の実態、などの資料を通して理解を深めさせる。そして、これらを踏まえて、「地域の教育力の回復を求めるには何が必要か、どう

すれば可能になると考えられるか」を講義し、まとめへともっていくことになる。

評価は、毎回宿題を出していることもあり、これらの提出状況（出席状況でもある）を40点とし、定期テストは、これまでと同様の3問程度の出題（60点）としている。例えば、a（前期）では、“ノーマライゼーション”や“少子社会”といった用語の説明を求めるものや、「わが国の高齢者の“幸福な老い”に影響を及ぼす要因にはどのようなものが考えられるか、主なもの3点を挙げて解説しなさい」などである。b（後期）も同一の方針で行い、テスト問題では、例えば、「近隣関係の維持を“ヤマアラシのジレンマ”現象を用いて説明するとき、住民はどのような点に留意すべきか、あなたの考えを述べなさい」、そして、一年を締めくくるに際しての問題として、「あなたが考える“福祉社会心理学”とはいかなる科学か。理念・定義・研究領域・テーマなどについて、その構想を述べなさい」を必ず問うこととしていた（この問題だけは事前に通告し、解答を用意しておくよう求めた）。

## 2 文学部時代のゼミ生の指導

以上が、文学部時代の講義内容であるが、これとともにあるゼミや卒論については、およそ次のようであった。

「地域コミュニケーション論」として講義してきた最初の4年間（つまり4期生まで）は、短大時代の踏襲であったこともあり、卒論のテーマも地域社会に関わるものであれば自由とし、先に紹介した短大時代のものと大きく異なるものではない。ただ、質問紙調査を用いた研究では多変量解析を導入し、3年次前期に重回帰分析や因子分析など9種類の解析法の簡単な理論（理屈）や分析結果の見方を、私の作成した資料を用いて学ばせ、後期は、実際に解析法用の簡単な質問紙を作成し、データを取った上で分析の実習をさせることとした。解析ソフトとして、HALBAU（HALWIN）が用いられた。ここで学習した解析法を自分の卒論データに適用することで、短大生の卒論からのレベルアップを目指したつもりである。

「社会コミュニケーション論」として、“福祉社会心理学”を名乗って行った後半の5年間では、卒論の目的をより明確なものとして位置づけた。すなわち、①研究法は質問紙調査法に限定する、②仮説検証型の研究とし、重回帰分析もしくは判別分析(数量化理論Ⅰ類・Ⅱ類を含む)を用いて、結果変数の原因となる要因を予測させ、それらを変数として用意した上で、実際の影響力の大きさを確認する、③研究に投入する変数のうち、心理尺度のいくつかを自作させる(但し、尺度は信頼性のチェックまでとし、妥当性は求めない)、④これらを満たす意図から、テーマは講義で取り上げた内容(コミュニティの問題)に必ずしもこだわらなくてもよいこととする、というものである。こうして、つまりは曖昧さの少ない科学としての心理学の一端を理解させようとしたものである。仮説の適否や予測の当たり外れが一瞬にわかり、しかも数値として冷徹な姿を現す。己の理解力や判断力、選別力をこの上なく明快に知ることができる教育方法と考えた次第であった。

また、これを機に「卒業論文の書き方」という冊子を作成した。『コミュニケーションと人間』に掲載されたゼミ先輩学生の優秀卒論(実際の卒論を10ページの分量に圧縮したもの)を、A4用紙横置き中央に、1ページごとに縮小したものを置き、その左右の余白に本文と対応づけながら、論文を書く際の文章や図表に関する注意事項の詳細をコメントしたものである。毎年のごとく改訂版を作り、最終的にVer.5までになった。これを参考にすることで、全員が卒論としての一定の水準を維持することができるようになり、ゼミ生はもちろんのこと、指導する私もずいぶんと楽になった。ただ、弊害もあり、どれもこれも同じ書き方や図表になり、書き手の個性が薄れて、読む側の楽しみがなくなってしまったことであった。

文学部時代のゼミ生の総数は103名であったが、短大の場合と同様にテーマを大まかに分類すれば、以下の11分類になろう。ただ、前述のように、後半のゼミではテーマをコミュニティや福祉の問題にこだわらないこととしたことが作用して、大学生としての自己に直結する関心事が最も多くなっている。

- 1位 青年の自己意識・人生観(23篇):「大学生の私生活主義の背景要因」「現代青年の社会規範意識に影響を及ぼす背景要因」「女子大学生における性役割観形成に影響する背景要因」など
- 2位 高齢者のQOL(12篇):「高齢者の生活の質(QOL)に影響を及ぼす背景要因」「地域社会環境が高齢者の主観的幸福感に及ぼす影響」「高齢者のスポーツ活動とその背景」など
- 3位 中高年女性のライフスタイル(11篇):「写真投影法を用いた主婦の日常生活の分析」「中高年女性における老後の生活設計」「主婦の幸福感受到に影響を与える要因」など
- 4位 援助・向社会的行動(9篇):「地域社会における女子大生の援助行動」「女子大生の向社会的行動の背景要因」「大学生の視覚障害者への援助行動に影響を及ぼす背景要因」
- 5位 育児不安(8篇):「専業主婦の育児不安とその背景要因」「働く女性の育児不安」「幼児を育てる母親の母役割充実感に影響を及ぼす背景要因」など
- 6位 障害者観(7篇):「知的障害者に対する健常者の態度」「障害の種類と障害者に対する態度の関連について」「大学生におけるノーマライゼーションへの関心に影響を及ぼす態度要因」など
- 6位 介護問題(7篇):「ホームヘルパーの介護労働意欲に影響を及ぼす背景要因」「障害者を介護する母親の障害者に対する世間観に影響を及ぼす背景要因」「障害者施設職員のエンパワメントに影響を及ぼす背景要因」など
- 6位 ストレス(7篇):「中高年男性の地域社会への態度と社会的ストレスの関連」「働く母親の多重役割従事に関するストレスの研究」「小学5・6年生の学校生活におけるストレス反応とその背景要因」など
- 9位 ボランティア活動(6篇):「男子大学生のボランティア活動・非活動に及ぼす背景要因」「高校生のボランティア活動観」「成人のボランティア活動に対する態度」など
- 10位 地域社会観(3篇):「過疎地域の中の子ども」「過疎地域に住む中学生の社会移動観」「高



校生の定住・移住意識に影響を及ぼす背景要因」その他（10篇）：「女子大学生の喫煙行動の予防に影響を及ぼす背景要因」「中学生のいじめ場面における仲裁者役割指向に影響を及ぼす要因の検討」「漫画「サザエさん」にみる戦後家族関係の変遷」など

#### IV コミュニケーション心理学科における「福祉社会心理学」および「コミュニティ心理学」の概要

##### 1 講義内容

ミレニアムの2000年4月、文学部コミュニケーション学科は、コミュニケーション心理学科、言語コミュニケーション学科、ビジネスコミュニケーション学科の3学科からなるコミュニケーション学部として独立した。その中で、文学部コミュニケーション学科の理念や構成をそのまま引き継いだのが、わがコミュニケーション心理学科である。

新学科では、認知・生理領域、社会領域、臨床領域の3本柱構成になるとともに、教員も増員された。その結果、文学部時代のように、専任教員の専門各論を2年次の前・後期通して講義する時間割を組む余裕がなくなり、前期か後期のいずれか半期のみ短縮されることとなった。

私の講義は社会系に位置づけられ、2年前期科目として配置された。半期のみ縮小されたこともあり、新たに内容を組み直し、科目名も文学部時代の後半からカッコ付きで名乗っていた「福祉社会心理学」を正式名称とした。ただ、2001年度から始まった当初の「目次」は、今手元にある「履修要覧」のコピーしか残っておらず、ノートも紛失したのか、残念なことに存在しない。履修要覧には、「授業の概要」として「今日ほど家族と地域が福祉の問題と密接に関わり合っている時代はない。こうした現代社会の問題を、社会心理学およびコミュニティ心理学の視点を導入して、福祉社会心理学という発想で考察する」と述べ、「授業計画」として、

1. 歴史、理念、目標
2. 予防と介入
3. エンパワメントとセルフヘルプ

##### 4. ボランティア活動の心理的側面

##### 5. コミュニティにおけるヒューマンサービスとヘルスケア

##### 6. コミュニティづくりと社会変革

と、「目次」めいたものが掲載されているだけである。次年度（2002）からは詳細な「目次」とノートが残っており、これらから推測するに、あわただしい学部改組の中で、付け刃の講義を行ったようである。当時のことを全く思い出すことができないことや、ノートすらないところからも、そのように想像されるのである。

次年度からは、「福祉社会心理学」の正式科目名称のもとで、今度は「コミュニティ心理学」をカッコ付きで名乗ることにした。その理由は、本来なら科目名として「コミュニティ心理学」としたいのだが、まだ心理学の世界ですら知名度が低いこともあって、とりわけ学部生には理解が得られないと判断したことによっている（ちなみに、大学院での講義科目名としては、1995年のコミュニケーション研究科創設以来、「コミュニティ心理学」である）。

この「福祉社会心理学」を、正式に「コミュニティ心理学」に名称変更してスタートしたのが2005年度であった。この年から、カリキュラムを含む教務関連の方針が全学的に一新・統一されたことに伴うもので、半期15回の講義回数を厳守すること、テストは講義時間に含めないことや、授業計画など履修に関わる情報を学生に丁寧に告知するシラバスづくりなど、それ以前からも行っていた学生による授業評価（本学では、「評価」ではなく、教員が授業改善に資するための「アンケート」と位置づけている）も含めた制度改革が背景にある。

「目次」の章立ての順序や、内容やデータの改変は毎年のように行っているが、構成の思想や理念は、2002年当初の「福祉社会心理学（コミュニティ心理学）」と基本的に異なるところはない。ただ、この間に、1999年にDuffy & Wong (1996)を、また、2005年にはScileppi et al. (2000)の、いずれも『コミュニティ心理学』という書名の翻訳を行ったり、『よくわかるコミュニティ心理学』（2006）や『コミュニティ心理学入門』（2007）、

さらには『コミュニティ心理学ハンドブック』(2007)の編著を出版したこともあり、それらからの情報を適宜導入して、講義に反映させている。ここでは、最も新しい2012年度の「授業の概要」と「授業計画(目次)」を掲載しておく。

「コミュニティ(地域社会)の中で生起する社会問題について、問題を抱えている個人や家族、集団、組織などを、人よりもむしろ環境に焦点を合わせて、予防したり、エンパワーしたり、代替物を選択したり、コミュニティ感覚を養うことを通して、人と環境の適合をはかることを目指すのがコミュニティ心理学である。この講義では、こうしたコミュニティ心理学の理念について、具体的な社会問題と結びつけながら考えていく。」

- 1回 序章：コミュニティ心理学とは
  - 1節 歴史的背景
- 2回 2節 コミュニティ心理学の理念と目標
- 3回 1章：子どもとコミュニティ心理学
  - 1節 子どもと生育環境：人-環境適合
- 4回 2節 子どもの虐待：予防(1)
- 5回 3節 地域における子育て支援：ソーシャルサポート・ネットワーク
- 6回 4節 教師との心理学の共有化：コンサルテーション
- 7回 2章：高齢者とコミュニティ心理学
  - 1節 高齢者・高齢社会とは：エイジングとエイジズム
- 8回 2節 高齢者のヘルスケア：予防(2)
- 9回 3節 高齢者の自立：エンパワメント
- 10回 4節 高齢者の幸福な老い：クオリティ・オブ・ライフ
- 11回 3章：障がい者とコミュニティ心理学
  - 1節 障がいとは：ラベリング
- 12回 2節 知的障がい者と社会：多様性の尊重
- 13回 3節 知的障がい者と地域社会：コミュニティ感覚
- 14回 4節 知的障がい者の支援：セルフヘルプ・グループ
- 15回 終章：再び、コミュニティ心理学とは
  - 1節 コミュニティ中心主義

## 2節 コミュニティ心理学のまとめ

評価は2回のレポート(各25点)と定期テスト(50点)で、レポート1回目は、実事例を元にアレンジした解決課題(例：「不登校生徒と適応指導教室」「都会の巨大ニュータウンに増える高齢者のうつ病」「知的障害者の家族」など)を出題し、「コミュニティ心理学を学び始めたあなたなら、これにどう立ち向かうか、それはどうすれば可能になると考えるか、大学生という身の丈にあった具体策を考え、提案しなさい」というもの。2回目は、コミュニティ心理学が関わりうる、子ども、高齢者、障害者、市民に関する「社会問題」について、白書類など最新の統計データに基づく資料を用いて、正解を含む3択の「クイズ問題」を2問ずつ作成し、その出題意図を解説するとともに、出典データを添付させるものである。前者は実践的な課題への解決策を、後者は社会問題への関心を引き起こすことを、それぞれ目的としている。

テストは、50点満点で4~5問とし、ノートや配付資料持ち込み「可」の代わりに、講義で述べた事柄を問う、一応の「正解あり」の知識を問う問題としている。例を挙げれば、「K. Lewinの $B=f(P,E)$ の公式を用いて、コミュニティ心理学の特徴を説明しなさい」「臨床心理学的カウンセリングと、コミュニティ心理学的カウンセリングの相違を論じなさい」「コミュニティ心理学の研究の基本姿勢として、「科学的中立」と「価値的中立」の区別が言われるが、これを説明しなさい」などというものである。

## 2 ゼミ生の指導

一方、ゼミや卒論の方針は、文学部時代から一変させた。文学部時代、とりわけ後半の「社会コミュニケーション論」の時代においては、前述したように質問紙調査による多変量解析を用いた仮説検証型の研究を指導していたが、コミュニティ心理学を前面に出すことにした新学部のゼミでは、一転して質的研究法に限定する方針をとることとした。心理学の潮流が、新世紀を境に量的研究から質的研究へと転換していることに対応したこと

が背景にある。

また、以前のゼミは、ゼミとは言いながら、卒論作成のための個別研究の集合体のスタイルであったものを、ゼミ本来の姿をとることとした。つまり、3年次は全員が一つのテーマのもとに1年間をかけて共同研究を行い、年度末に「報告書」を刊行するというものである。テーマはコミュニティ心理学が扱っている広義の社会問題とし、年度開始早々に2泊3日の合宿を行って、全員でテーマと対象を決める。これまでの例を2、3挙げれば、児童養護施設、高齢者介護施設、精神障害者小規模作業所、子育てサークルなどを対象とし、当事者や職員、地域住民を研究参加者とする面接調査を行うのだが、それを、エンパワメント、ソーシャルサポート、人-環境適合、といったコミュニティ心理学の視点でアプローチするものである。ゼミ生は視点ごといくつかのグループに分かれ、5月下旬からボランティア先を探して各自参入する。8月末までの参加の後、9月早々に、予めメンバーで決めておいた質問項目に基づいて対象者にインタビューを行い、それを基に逐語録を作り、KJ法を用いて分析するのである。

9月中旬の2泊3日のゼミ合宿は、各自が持ち寄った大量の「紙切れ」の分類作業に費やされ、後期の授業開始後は、KJ法による図解化と原稿作成作業に明け暮れることとなる。こうして、悪戦苦闘の末できあがった「報告書」が1月末のゼミ最終日に印刷業者から届けられ、これを協力してもらった機関や関係者に手渡すことで3年ゼミは修了する。

続く4月からの卒論は、各自の関心に沿ったテーマで、対象者捜しも今度はこれを一人で行うことになる。私の役割といえば、3年次に徹底して指導した分、ここでは特別何をするともなく、毎週のゼミの発表において各人の進行状況を確認し、ゼミ生同士のやりとりコメントをしながら必要に応じて相談にのるというスタイルである。

この報告書や卒論を書くための「手引き」として、先に、質問紙調査を用いて数量的研究を行って卒論を書く際に作成したのと同じ趣旨のものを作成した。幸い3期生の卒論に優れた研究が得られたことによるもので、これを事例とする「卒

業論文の書き方（質的研究篇）」である。

コミュニケーション心理学科の10年間の卒論のテーマを、これまでと同じく分類すると、以下のようになる。卒業生は100名である（2013年3月卒業予定を含む）。ただ、先にも述べたように、1期生は学部創設に伴う私自身の混乱の影響もあって、文学部時代の卒論の方針を踏襲しており、この時の15名は本稿での分析から外してある。

分類は、これまでの対象者中心から、コミュニティ心理学のテーマや基本理念別で示している。

- 1位 ソーシャルサポート（17篇）：「認知症高齢者の在宅介護者へのソーシャルサポート」「保育士のストレスに対するソーシャルサポートの効果」「先輩ママによる子育て支援が母親に与える影響」など
- 2位 人-環境適合（13篇）：「介護老人保健施設の介護職員を取り巻く職場環境改善への方略」「中途失聴者・難聴者が生活しやすい環境の改善」「児童養護施設の小規模化が子どもに及ぼす影響」など
- 3位 予防（12篇）：「若年者の交通事故予防」「未成年者の喫煙問題に対する一次・三次予防策」「知的障害者自立支援員の精神的・身体的健康維持」など
- 3位 社会資源・非専門家の活用（12篇）：「介護福祉施設におけるボランティアの活用について」「NGOスタディツアー参加者へのフォローアップの重要性」「子どもの生活の場としてのよりよい学童保育の在り方」
- 5位 エンパワメント（9篇）：「滞日フィリピン人女性の日本社会への適応促進」「母親のエンパワメントに注目しての子育て支援」「中年世代や高齢者の情報格差を改善するには」など
- 6位 QOL・ウェルビーイング（5篇）：「障がい児をもつ母親の幸福感を高めるための方略」「高齢者のQOLを高めるための背景要因」「老人福祉センター利用者の生きがい感の現状と将来展望との関連」など
- 6位 コミュニティ感覚（5篇）：「子どもを犯罪から守るために地域が果たす役割と防犯」「看

護師のバーンアウト予防のための方策としての  
「コミュニティ感覚」「トワイライトスクール内  
でのコミュニティ感覚」など

8位 多様性の尊重(4篇):「フリースクールは  
不登校生徒の代替学校になりうるのか」「適応  
指導教室が不登校生徒に及ぼす影響要因」「精  
神障害者に対する偏見を低減させるための方略」  
など

その他(8篇):「若者とインターネット・コミュ  
ニティとの関わり方」「大学生と高齢者が関わ  
りをもつための方略」など

## 結 語

以上が、これまで27年間の講義とゼミの軌跡で  
ある。ところで、今年6月、私の70歳の誕生日に、  
これまでの講義の集大成ともいふべき著作を上梓  
した。以下にその「目次」を掲げることで、本稿  
のまとめに代えることとしたい。

植村勝彦著「現代コミュニティ心理学 理論と展開」  
(東京大学出版会, 2012.6.15刊)

## 目 次

まえがき

序章 コミュニティ心理学とは何か

### 【理論篇】

- 1節 コミュニティ心理学の簡単な歴史的背景
- 2節 コミュニティ心理学の定義
- 3節 コミュニティ心理学の理念

### 【展開篇】

- 4節 アメリカのコミュニティ心理学の社会文化的背景
- 5節 アメリカのコミュニティ心理学研究のトピックス
- 6節 日本のコミュニティ心理学

## 第Ⅰ部：子どもとコミュニティ心理学

オープニング・クイズ

1章 子どもと生育環境：人と環境の適合

### 【理論篇】

- 1節 人と環境の適合
- 2節 社会的文脈の中での存在としての人間
- 3節 人と環境をめぐる諸理論：生態学的視座

### 【展開篇】

- 4節 乳幼児施設的环境改善と子どもの発達
- 5節 高層集合住宅と幼児の自立の遅れ
- 6節 乳幼児期の育児環境としてのメディア接触

2章 地域における子育て支援：ソーシャルサポート

### 【理論篇】

- 1節 ソーシャルサポート研究の概観

2節 ソーシャルサポート・ネットワーク

3節 ソーシャルサポート介入

### 【展開篇】

4節 保健センター・保健所・療育施設の連携：ソーシャル  
サポート・ネットワーク

5節 こんにちは赤ちゃん事業：ソーシャルサポート介入

6節 子育て支援ボランティア養成プログラム

3章 教師との心理学の共有化：コンサルテーション

### 【理論篇】

1節 コンサルテーションとは何か

2節 コンサルテーションの特徴

3節 コンサルテーションの最近の展開

### 【展開篇】

4節 不登校の男子中学生へのコンサルテーション

5節 コンサルテーションの失敗事例：留意点と進め方

6節 学級のアセスメントを用いたコンサルテーション  
クロージング・エクササイズ

## 第Ⅱ部：高齢者とコミュニティ心理学

オープニング・クイズ

4章 幸福な老い：ウェルビーイング

### 【理論篇】

1節 クオリティ・オブ・ライフ(QOL)とウェルビーイ  
ング

2節 主観的ウェルビーイングの測定

3節 個人のウェルビーイングを超えて

### 【展開篇】

4節 高齢者の心理的ウェルビーイング測定尺度の開発

5節 高齢者の生きがい感：尺度の作成とその背景要因

6節 パートナリシップから見た高齢者のウェルビーイング

5章 高齢者のヘルスケア：予 防

### 【理論篇】

1節 予防の簡単な歴史

2節 予防の類型

3節 予防方程式

4節 予防の倫理的問題

### 【展開篇】

5節 農山村地域における高齢者の自殺予防

6節 大都市近郊の大規模団地に住む高齢者のうつ・孤独  
死予防

7節 地域在住高齢者への介護予防：回想法の活用

6章 高齢者神話とエイジズム：ラベリング

### 【理論篇】

1節 ラベリングとは何か

2節 コミュニティ心理学とラベリング理論

3節 ラベリングの適用

### 【展開篇】

4節 若者の老人差別意識

5節 男子青年のエイジズムに関連する要因

6節 高齢者の自己ラベリング

クロージング・エクササイズ

## 第Ⅲ部：障害者とコミュニティ心理学

オープニング・クイズ

7章 障害者の自立：エンパワメント

### 【理論篇】

1節 エンパワメントの概念・定義

2節 エンパワメントの過程とレベル

3節 個人・組織・コミュニティのエンパワメント  
 4節 エンパワメントの測定  
**【展開篇】**  
 5節 聞き取り調査を通して見る精神障害者のエンパワメント  
 6節 統合失調症患者者のエンパワメント  
 7節 「べてるの家」におけるコミュニティ・エンパワメント

8章 地域社会の受け入れ：コミュニティ感覚  
**【理論篇】**  
 1節 コミュニティ感覚とは何か  
 2節 コミュニティ感覚の問題点  
 3節 コミュニティ感覚と関連する諸概念  
**【展開篇】**  
 4節 薬物乱用回復施設における居住者のコミュニティ感覚  
 5節 コミュニティ意識類型による住民の障害者観の比較  
 6節 コミュニティ意識類型による障害児をもつ家族の近隣・地域社会に対するストレスの比較

9章 当事者・家族の会：セルフヘルプ・グループ  
**【理論篇】**  
 1節 セルフヘルプ・グループとは何か  
 2節 セルフヘルプ・グループの有効性  
 3節 セルフヘルプ・グループとコミュニティ心理学  
**【展開篇】**  
 4節 ヘルパー・セラピー効果出現のメカニズム  
 5節 インターネット上のセルフヘルプ・ネットワーク  
 6節 セルフヘルプ・グループと専門職の関係：コミュニティ心理学からの事例  
 クロージング・エクササイズ

第IV部：市民とコミュニティ心理学

オープニング・クイズ

10章 ストレス社会に暮らす：ストレス・コーピングとマネジメント介入  
**【理論篇】**  
 1節 コミュニティ心理学的ストレス理論：Dohrenwend, B.S.の心理社会的ストレス・モデル  
 2節 コーピング  
 3節 ストレスマネジメント介入  
**【展開篇】**  
 4節 ヒューマンサービス職のバーンアウト  
 5節 ワーク・ファミリー・コンフリクトと従業員支援プログラム

6節 在宅障害高齢者の介護ストレスへの対処  
 7節 災害被害者のストレスと心のケア

11章 多職種との連携：コラボレーション  
**【理論篇】**  
 1節 コラボレーションとは何か  
 2節 コラボレーションから得られるものと課題  
 3節 コミュニティとのコラボレーション  
**【展開篇】**  
 4節 学校臨床におけるコラボレーション  
 5節 ひきこもりのセルフヘルプ・グループ代表者とのコラボレーション  
 6節 児童相談所におけるコラボレーション

12章 現代社会とコミュニティ：社会変革  
**【理論篇】**  
 1節 なぜ社会変革が求められるのか  
 2節 社会変革とは何か  
 3節 計画的な社会変革はどのようにして行われるか  
 4節 社会変革はなぜ失敗するのか  
**【展開篇】**  
 5節 多様な住民の存在  
 6節 縮小する財源  
 7節 説明責任  
 8節 知識や技術の急速な進歩  
 9節 コミュニティ・コンフリクト  
 10節 伝統的サービスへの不満  
 11節 解決法の多様性への要求  
 クロージング・エクササイズ

終章：再び、コミュニティ心理学とは何か

**【理論篇】**  
 1節 コミュニティ中心主義  
 2節 コミュニティ心理学の援助モデル  
 3節 コミュニティ心理学者の役割と価値  
**【展開篇】**  
 4節 インターネット・コミュニティと地域社会  
 5節 コミュニティ心理学のこれから

文 献

オープニング・クイズ正解  
 あとがき  
 人名索引  
 事項索引